

八木聖弥著

『太平記的 세계의 研究』

(思文閣出版・一九九九年)

佐々木 馨

を基本とするものでしかなかった。そうした現状に鑑み、「『太平記』のもつ本質に考察を加えるだけでなく、広く『太平記』の描く時代を文化史学的視点から論じたのが本書である(「序章 研究史」)。

月並みであるが、次に本書の内容構成を紹介したい。

序 章 研究史

第一章 『太平記』とその時代

第一節 『太平記』の成立

一 問題の所在

二 『太平記』の作者と成立

三 『太平記』編纂の目的

四 夢窓疎石と『太平記』

五 結語

第二節 『太平記』の思想

一 問題の所在

二 後醍醐政権の限界

三 君臣合体論

第三節 足利政権の成立

一 問題の所在

二 尊氏邸

三 直義邸

本書は同志社大学文学部教授・笠井昌昭氏の門下の俊英である著者の学位論文である。『日本歴史』は本年七月号(第六二六号)の「新刊寸描」に本書の刊行を速く採り上げ、「充実した内容であった」と速報した。この一点を見るだけでも、本書の高い評価が偲ばれよう。私たちは、この同志社大学文学部にとつての快挙であると同時に、日本中世文化史にとつての画期的な福音をまずもつて心より喜びたい。

著者にとって、『太平記』とは「まことに魅力的な書物」であるという。そこには「古い価値観を打破する群像は躍動的に描かれていて、一つの事柄に対し古典を縦横に引用して、古代からの伝承を総括するという役割も果たしている。革新と保守、矛盾した構図が混在している」という(「あとがき」)。

しかし、著者の眼に映るその従前ないし現状の『太平記』研究は、国文学では本文研究、歴史学では史料としての史実認定

四 政権の推移

第二章 『太平記』的 세계의 信仰

第一節 初期足利政権と天神信仰

一 問題の所在

二 足利氏と天神信仰

三 儒教の徳治主義と天神信仰

第二節 忽靈思想と天龍寺創建

一 問題の所在

二 『太平記』の忽靈記事

三 夢窓疎石

四 天龍寺創建

五 足利氏と天龍寺

第三章 『太平記』と地藏信仰

一 問題の所在

二 足利氏と地藏信仰

三 恵鎮と戒律

四 律僧と『太平記』

五 結論

補論 天神縁起と『太平記』

一 問題の所在

二 『太平記』所引の天神縁起

三 天神縁起所引の背景

第三章 猿楽能と『太平記』的世界

第一節 修羅能成立の環境

一 問題の所在

二 觀阿弥時代の修羅能

三 世阿弥時代の修羅能と幽玄論

第二節 物狂能成立の一系譜

一 問題の所在

二 徒來の諸説

三 物狂への契機

第三節 物まね論成立の周辺

一 問題の所在

二 物まね論の形成

三 結語

終章 『太平記』的 세계から幽玄的世界へ

あとがき

索引

以上のような内容構成であるが、分量的には、本文二七五頁、あとがき三頁、索引十頁の構成となつてゐる。

本文三章立ての内容構成を一瞥され得どうであろうか。第一章は『太平記』に対する作品論と政治思想史、第二章は信仰ないし思想史、第三章は芸能史を中心としていることが一目瞭然であろう。著者が本書の目的を、「広く『太平記』の描く時代

を文化史学的視点から論じる」とした所以も首肯されよう。

周知のように、家永三郎氏はその著『日本文化史』(岩波新書)の中で、文化を「學問や芸術や宗教や思想・道德などの領域を指す」と定義している。この最もオーソドックスな定義に照らしても、本書はその内容構成上、じつにバランスのとれた理想的な文化史研究となっている。

三

次に、内容紹介とそれに対する若干のコメントを申し述べたい。まず、「序章 研究史」は、文字通り、本論三章に関する研究史の整理と課題の提示である。その冒頭で、『太平記』研究の概括的な推移を眼配りよく跡付けられたことは、一般読者にとつても有難い。

すなわち、『太平記』研究は、明治以後、国文学にあつては後藤丹治氏の『太平記の研究』、歴史学においては久米邦武氏の「太平記は史学に益なし」の論文に始まる。それを受けた戦後の国文学では、永積安明氏と谷宏氏を中心とした『平家物語』との比較をめぐる『太平記』の評価論争が展開される。一方の歴史学の分野では、桜井好朗氏の社会史的アプローチ、黒田俊雄、林屋辰三郎氏による「変革エネルギー」としての人物研究に関心が寄せられた。しかし、この「変革エネルギー」論に対する、国文学の山下宏明氏が「士大夫的エネルギー」を主張して、『太平記』の人物研究のむつかしさを斯界に示した。

著者はこのように、明治以後の『太平記』研究史を概観した上で、一九五〇年代後半に『太平記』の成立論が顕在化していくと捉えている。ここまで読み進めて気がつくことは、研究史の論点整理がじつに簡明にして要を得ていてある。ある意味、この部分は『太平記』研究入門編となつており、私たちを心地よく本論へと導いてくれる。

〈第一章第一節 「太平記」の成立〉

著者によれば、現存の四十巻本『太平記』の成立年代は、応安四年（一二七二）頃とほぼ決定しているが、問題はその作者であるという。その作者をめぐり、今日まで、「小嶋法師」＝「卑賤之器」の出自について、さらには『難太平記』に散見する恵鎮と玄惠との位相について議論百出の状況があつたという（序章 研究史）。

この現状を受けて著者は、『太平記』の成立過程を、「小嶋法師」による情報提供→恵鎮の後をうけた玄惠はその最終的監修者という道筋を立てる。「一応の目安」と控え目であるが、その道筋には論理的説得力がある。

ついで著者は、『太平記』の中に觀察される「批判精神」と怨靈記事の徹底分析および夢窓疎石と足利氏との法交に着目し、『太平記』は足利政権の「教訓書」として編纂されたことを立証される。とりわけ、足利氏の政治顧問を務める玄惠と夢窓疎石が『太平記』の編纂に参画したことを検証されたことは、『太平記』の作者論を大きく前進させたと評していく。

思うに、著者にこうした新説を可能とさせたのは、『太平記』を「あえて価値観を統一せず、異種を包含する精神」世界（本書五三頁）とみなし、その成立プロセスを柔軟かつ段階的に捉えさせた鋭敏な着想力であろう。ここに、『太平記』の古くて新しい作者論も、またひとつの大きな収穫を共有することができた。

〈第一章第二節 「『太平記』の思想〉

著者は、これまでの『太平記』の思想研究を仏教の「因果論」と儒教の「徳治主義」が中心であった（序章 研究史）と指摘した上で、『太平記』を貫く思想的根幹は『貞觀政要』であることを指摘する。『貞觀政要』が説く君臣合体の論理、諫臣の重要性は『太平記』に通底する思想と力説する。ついには、『貞觀政要』の精神は、仏教の「因果論」をも含めし、『太平記』の命名にも『貞觀政要』が影響してはいないかと推量する。著者の指摘・力説・推量された『太平記』と『貞觀政要』との深い思想的影響関係については、『太平記人名索引』（北海道大学図書刊行会）の編著者でもある大隅和雄氏がつとに、「『太平記』を巨大な「往来物」と規定され、「平安時代以来の古典的な系譜に属し、それを再編成して広い享受層に提供すると、いう啓蒙的な役割を果たしたものであった」と高説している。ここに至つて、著者の『太平記』の作品研究の独自性が『太平記』

の編纂過程を段階的に捉え、それが直接的には足利氏の「教訓書」として編まれたことに限定し、併せて『貞觀政要』が『太平記』の思想的根幹であることを解明したことに求められよう。

〈第一章第三節 「足利政権の成立〉

本節は尊氏と直義の政治的権限に関する佐藤進一氏を中心とする「政権分担論」に対し、羽下徳彦氏の「政権移譲論」に賛同する立場から、尊氏・直義の邸宅（幕府）の位置を内裏との位置関係に注目しつつ、足利政権の歴史的性格を考察した部分である。

川上貢氏の『日本中世住宅の研究』に依拠しながらも、それを発展的に攝取し、尊氏は元弘三年（一二三三）→建武元年（一二三四）の頃、後醍醐天皇の一条富小路内裏にほど近い場所に二条高倉邸を、その焼失後の建武四年の頃、二条大路を越えて、光明天皇の土御門東洞院内裏附近に邸宅を構えたとみる。

一方の直義邸は、尊氏の二条高倉邸の南隣に、幕府と呼ぶにふさわしい三条坊門邸を構えたとみる。さらに、尊氏から直義への政権移譲の時期は、尊氏の清水寺への「願文」の分析から、建武二年の中先代の乱直後であろうと推察する。そして結論として尊氏と直義が「天皇の至近に邸宅を構えたのも、幕府を京都に置いたのも、ひとえに公家官制での地位向上を考えたからにほかならない。そしてみずから擁した天皇になりかわり天下を治めることを望んだと思われる」（本書九九頁～一〇〇頁）と

推定する。著者は「尊氏の意識の根本には、「われは源家累葉の貴族なり。王氏を出でて遠からず」(『太平記』卷九、「足利殿御上洛事」との自負があつた) (本書一〇〇頁) 点を強調されてゐる。

今や歴史学のエヤーポケットともいふべき政権所在地論に新たな息吹を与えた清涼な足利政権論として注目していいだろう。

以上が本書の『太平記』に対する作品論と政治思想史を中心とした第一章「『太平記』とその時代」である。

次は『太平記』の中の信仰ないし思想史を扱う第二章『太平記』的世界の信仰である。前章と同様、内容紹介と若干のコメントを付していきたい。

〈第二章第一節「初期足利政権と天神信仰」〉

本節の主題は、師笠井昌昭氏の『天神縁起の歴史』に導かれながら、足利氏にとって天神信仰とは何かを問うことにある。

「北野通夜物語 付青砥左衛門事」における政道談義の場に北野社が選ばれた理由、尊氏・直義の熱烈な天神信仰の背景を、著者は尊氏が九州に敗走した折、少弐氏の影響を受けた点に求めている。

ついで著者は、より具体的に、尊氏による自邸での天神講の開催、北野社での天下静謐祈願、北野社師職の掌握、北野社での大般若經駁説などの事実を列挙し、足利氏と天神信仰の深い関わりを立証する。さらに、著者は怨靈が転じて守護神となる天神信仰と儒教の徳治主義が禅僧（夢窓疎石）を媒体として結

びついていることに注意を払っている。

そして、「信仰」に留まつていた北野社への神觀念が前提となり東照宮が成立したと推定する。「足利尊氏にはじまる武家の、天神信仰の延長線上に東照宮の成立をみることも可能ではなかろうか」と（本書、一二四頁）。

本節は研究史的にみて、足利氏と天神信仰を真正面から検証した点で、画期的である。また、尊氏の天神信仰受容を東照宮の前提と位置づけたことも甚だ示唆的である。

と同時に、評者には、これほど足利政権の中枢に深く入り込んだ天神信仰を知るにつけ、前代の鎌倉幕府の宗教世界のことが、ふと思いついた。

〈第二章第二節「怨靈思想と天龍寺創建」〉

本節では、『太平記』の中の怨靈記事をつぶさに検証する一方、先行研究を参考しつつ、天龍寺創建をめぐる尊氏・直義と夢窓疎石との深い交流のなかに、怨靈思想＝怨親平等と華嚴思想が貫流していることを総合的に検証する。その上で著者は、玉懸博之氏が天龍寺・安國寺・利生塔の設営を尊氏・直義・夢窓疎石の三者一体の営みとみたのに対し、三者の人間関係の深層心理には各々、独自の思想性があつたと主張する。

ここでその当否を俄かに決するのは至難である。ただ、天龍寺創建が旧仏教側を排除して推進した結果、山門派の瞰訴が惹起したという一点にも象徴されるよう、この期の仏教政策は、一宗一派との絡みでは解けないことだけは明言できよう。私た

ちは、この室町政権の宗教世界に對して、もつと複合的かつ構造的な意を注ぐべきではなかろうか。そこに前の當否の答えも潜んでいるようと思える。

〈第二章第三節 「『太平記』と地藏信仰〉

著者は本節において、二つのことを整合的に解明された。一つは、辻・今枝両氏などの先行研究に依りながらも、今なお不十分であった尊氏の個人的な地藏信仰にスポットを当て、それが契機となって、地藏菩薩を本尊とする等持院および等持寺の官寺化が推し進められた点である。今一つは、荒木・砂川両氏の先学を一步進めて、天台僧でありながら律僧的な勸進活動をするかの惠鎮を改めて照射したこと、併せて、卷二十五「三宅荻野謀叛事 付壬生地藏」に着目して、壬生地藏の靈験譜は律僧の導御を介して『太平記』の素材となつたことを解き明かした点である。

ここに、恵鎮・導御（律僧）・地藏・足利氏が一本の糸で結ばれたことは、従前の『太平記』の成立・作者論上において、まったく画期的であることは、もはや多言を要さない。

以上の尊氏の個人的な信仰にはじまる天神信仰や地藏信仰をみると、賴朝の個人的な法華信仰のことを彷彿とさせられるのは、独り評者だけであろうか。

また、後者の地藏信仰はこの時期、『地藏菩薩靈驗記』が出現したことに示されるように、地藏菩薩とりわけ、生身地藏は「民衆にとって生産活動そのものの世界における救護者の存在

以外の何者でもなかつた」（譽田慶信『中世奥羽の民衆と宗教』）ことを考えれば、尊氏の甚だ現実的信仰心を垣間見る思いがする（後述）。

〈補論 「天神縁起と『太平記』〉

ここでは、『太平記』卷十一「公家一統政道事 付菅丞相事」に関する手堅い諸本の書序分析が試みられる一方、天神縁起の思想的背景にも迫まり、そこには慈円、『神道集』の安居院・惠鎮の人間関係が察知されることを指摘する。前の作者論の補強である。その中で、『太平記』作者は天神縁起に登場する人物を「醍醐天皇は後醍醐天皇に、道真は護良親王に、藤原時平は足利尊氏に重ねて描写した」（本書一九九頁）とみるのは卓見である。

以上で、『太平記』的世界的信仰を終え、次は芸能論の第三章「猿楽能と『太平記』的世界」に移る。

〈第三章第一節 「修羅能成立の環境」〉

觀阿弥の修羅能は『太平記』に取材するのに対し、世阿弥のそれは『平家物語』に取材すると著者はみる。それは、『太平記』には南朝方の怨靈が多いこと、徳治主義のもと田樂に興じて北条政権が滅亡したことが語られていること、さらにはその田樂に対する抗意識を持ったことからであると指摘する。まさに、世阿弥は『太平記』的世界から脱却し、幽玄尊重の芸能へと飛翔していったというのである。

〈第三章第一節 「物狂能成立の一系譜」〉

従前、世阿弥の物狂能の成立は、系譜的に修羅能・巫女の狂い・放下の三つに求められてきたが、「物狂への契機」を克明に分析した結果、一心不乱に唱える念仏もまたその一つの系譜になつていて、新たに発見した意欲的な部分。

四

世阿弥は幽玄を表現する手段としての物まね論の役柄を、女・老人・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事の九種類に分類している。従前、これを「現実に存在する役柄」と「現実に存在しない役柄」の二形態に分類してきたが、「物狂」を例に「現実と非現実の中間に存在する役柄」(物狂・修羅)が新たに類別可能などを、これまで意欲的に力説した箇所。本章は幼少の頃から「壬生大念佛講」に所属してきた著者ならではの立論である。まさに、地に足のついた理論と実践が和合した極致の圧巻となつていて、

〈終章　「太平記」的世界から幽玄的世界へ〉

本章は言うまでもなく、本書の「まとめ」である。ここに至り著者は初めて、「太平記」の世界を、「たんに動乱の時代をさすばかりではない」「多様な価値観が交錯する時代精神をもつことも含んでいる」(本書、二七一頁)と規定する。足利尊氏・直義、そして觀阿弥はまさに「太平記」の世界のなかにあつた。

義満と世阿弥の志向する王朝美を基準とする世界は、「太平記」的世界から脱却した「幽玄的世界」であつた。著者はこのように両世界を規定したあと、「太平記」の世界の対極にあるのが

紙数も尽きてきたが、最後に本書全体の評価と著者への大きな期待を申し述べたい。

『太平記』の考察と『太平記』の描く時代の文化史学的な研究という著者の目的が見事に達成されたことは、前の紹介により、もはや自明であろう。本書は私たちに、複雑に錯綜する『太平記』の作品・作者像を整合的に提示する一方、私たちを尊氏・直義の知られざる「怨親平等」の信仰世界に誘い、かつ世阿弥の『太平記』の世界から「幽玄的世界」へと脱却・飛翔する場面をも教示してくれた。

著者にとって、『太平記』は魅力的な書物であるという。私たちにとつても、本書はまことに魅力的な書物となつた。

本書の本領は何と言つても、鋭い研究史整理に支えられた卓越した『太平記』全体への構想力と、尊氏・直義・觀阿弥・世阿弥への着実な洞察力にある。本書が文化史研究として、結晶度の高いバランスのとれた名著であることを、ここに改めて確認したい。

翻つて思うに、横井清氏の『中世民衆の生活文化』は、「民衆文化の振幅」「民衆生活の起伏」「差別と触穢思想」にみるよう、民衆の照射にその関心があつた。本書の対象はその対

幽玄的世界であり、両者は交互に繰り返されながら時代は進展する」と述べ、結章する。

にある歴史の屋台骨となつた、まさに歴史的巨人であり、その意味で、王道の文化史的研究といえようか。

著者が説かれるように、『太平記』的 세계とは、動乱時代の多様な価値観を対象としている。本書はその多様性の中の、最も中核となるべき人々を『太平記』的 세계の所産として把握された。次作はいよいよ、この『太平記』的 세계を核にし、その周辺をとり込んだ「内乱期的 세계」の構築であろう。

周知のように、南北朝時代の文化は、大隅和雄氏がかつて高説されたように、「諸思想の錯綜」と「外来文化への対応」そして「文芸の革新」（同氏「内乱期の文化」）（岩波講座日本歴史中世2）に彩られていた。近作の尾藤正英氏の『日本文化の歴史』（岩波新書）においても、「内乱期の文化」は「神信仰の道德化」「民間の神社の成立」「共同性を基礎とした文化」を基調としている。

評者の個人的関心によれば、本書の尊氏・直義の天神、地蔵信仰をみて、鎌倉幕府の鶴岡八幡宮を拠点とする幕府の「武家的体制仏教」の世界のことが想起された（拙著『中世国家の宗教構造』『中世仏教と鎌倉幕府』）。

次作の『内乱期的世界の研究』においては是非とも、鎌倉幕府と室町幕府の比較宗教を視野に入れられ、儒教と思想的緊張の定着化をも取り込んでほしい。著者の柔軟でバランスのとれた文化史眼には、それが十分可能なはずである。

本書を土台にしたそうした『内乱期的 세계の研究』が結実した時こそ、著者が『中世文化の基調』の林屋辰三郎氏を凌駕した時である。私たちはその日の一日も早くからんことを期待したいと思う。

本年は「壬生狂言創始七〇〇年」に当たるという。その慶賀を寿ぎ、本書が斯界の多くに高誦され、あまねく福音の書となることを冀つて擲筆する。

（北海道教育大学教授）